望み心に満つれば
―― 田中忠次先生を思う ――

長　井　真　隆

私の母の里は田中忠次先生の家の近くにある。今は車で行けるが、以前は宇奈月行きの電車で行った。栃屋駅で下車してから、馬車が通る程の道を歩いて、県道宇奈月線にさしかかる。田中先生の家はその三叉路の向う側にある。母の里へは先生の家の裏のたんぼ道を通って行く。今は耕地整理で広い水田になっているが、当時は扇状地の等高線沿いの、曲がりくねった土手の小道であった。水田に水がはられると、よくぬかるんだ。

母はこの小道を通ると田中先生について話をしてくれた。田中先生は学校の先生であるが、昆虫の研究家としても有名な方だということ、村の人はこの家を海軍の家と呼んでいることなど、私が小学校に入学したか、しないかのころの記憶として今も新たである。発電所の排水路の有棘鉄線に刺されたモズの早にえの高さと、積雪の関係について、先生の研究が新聞で紹介されたことがあった。そのときも母は、その記事についていろいろと説明をしてくれた。先生は太平洋戦争中の、あの食糧難のころ、食べられる野草の講師としてもご活躍された。戦後間もなく、栃屋の山間部でハッチョウトンボの生息を確認され、ハッチョウトンボの発生地として富山県の天然記念物の指定に尽力された。栃屋の堤でヨツボシトンボを発見されたこともある。このニュースは、私が富山師範学校のころ、確か通学の汽車の中で新聞で知ったように思っているが、あるいは記憶違いかも知れない。

田中先生についての、さまざまな情報は、このように小さいころから見聞してきたが、先生にお会いしたのは、師範学校に入学してからのことである。当時、師範学校には生物部があって、そこではご活躍中の先輩を訪ねて、指導をお願いする慣わしがあった。田中先生をお訪ねするのは恒例であった。先生の家で昆虫標本を見せてもらったり、蝶や蛾の鱗粉転写の仕方を教えてもらったりして、その後から外にでるのである。コースは、今きた道を戻って、栃屋駅からさらに進んで発電所の送水管に沿った坂道を登り、堰堤のところからつづら折りの山道を歩いて、金比羅神社のある栃屋の山までである。家では奥さんがお茶にお菓子と、親切に接待して下さった。外では先生が、捕虫網を振って、捕らえた昆虫を逃さないように、こうやって網をたたみ込むのだと教えて下さった。蝶を網から取りだすとき、羽を傷めないように網の外から胸を……、蜂ならば刺されぬように親指の爪を盾にして、このように……、などとお手本を示されたが、その手なれたしぐさに私たちは目を見張った。先生が捕虫網で路肩の草むらを一掻きして、網から米粒ほどの小さな虫を取りだし、軍配に似ているだろう、だからグンバイムシというのだと教えて下さった。草むらといえば、バッタを想像するような私たちにとっては、まさに驚異であり、些細な道端でも、自然が多様なことに驚いた。

写真説明：栃屋の山にて。最後列左が田中忠次先生。前列右が山渕利文先生、左が私（昭和25年7月）

私が生物部の部長になってからも、動物学の山渕利文先生と一緒に、田中先生をお訪ねした。春の金比羅神社では、ギフチョウとその食草のカンアオイ（クビキカンアオイ）や、吸蜜植物のヤマザクラなどの関係を、また、初夏の山間では、ハッチョウトンボとその生息環境について教えてもらった。先生と野外にでると、道端の、いわゆるただの草や虫が、思い新たに生き生きと見えてくるのである。こうして先生からは、野外の中で生きた自然の見方をたくさん教えてもらった。昭和25年に、内田老鶴圃から「自然に拾う」というご著書を出版された。当時は、今と違って、戦後の低迷した、ひもじい時代であったが、先生のご出版は、私たちにほのぼのとした明日を感じさせてくれた。

私が教員になってからも、先生のお宅にしばしばおじゃました。子どもたちの夏休みの科学作品の昆虫の指導を受けるためである。一緒にいった子どもたちと、昼食までご馳走になり、奥様のサービスにすっかり甘えてしまったこともある。先生には魚津まで来て頂いたこともある。大光寺の通称シッタンタラケの谷合で、ジャコウアゲハなどについて現地指導をしてもらった。チョウトンボが飛んでいたし、ジャコウアゲハの食草のウマノスズクサがたくさん生えていた。カタクリもキクザキイチリンソウも、ツルシノブも、イノモトソウ、イワガネソウも生えていた。ここは、現在、国道８号線のバイパス工事で埋め立てられ、当時を偲ぶ面影はどこにも見当らない。

先生と一緒に宇奈月町の文化財調査委員をしていたころ、僧ヶ岳や池の平、鐘釣温泉、南越沢などの調査でご一緒した。夜が更けるまで白布を張って、明かりに寄ってくる昆虫を調査される先生はいつも印象的であった。白布に昆虫がとまると、昆虫の名前、過去に見た場所、とまる頻度などを、ぶつぶつつぶやきながら捕虫瓶に収容されるのである。このつぶやきが先生の一種の記憶術のようにも思われた。それから先生が持参される瓜の粕漬は最高においしかった。ご一緒するたびにご馳走になったものだ。私が富山市科学文化センターに勤務してからは、これもまた大変お世話になった。夏休みの終わりのころに行う「標本の名前を調べる会」では、先生をまる一日拘束してしまうのである。また科学文化センターに、先生が生涯をかけて収集された昆虫のコレクションを寄付して頂いた。先生が標本を所定の標本箱に移されたものから順に、昆虫担当の学芸員が頂いてきては、これを整理し防腐剤を封入して収蔵するのである。先生は行き届いた収蔵の仕方を高く評価され、その上でたくさんの標本を寄付された。紺綬褒章をお受けになり、先生は仕事の一つの節目だとして大変お喜びになった。

田中先生を最後にお訪ねしたのは、富山県生物学会の会計監査をして頂いた、平成５年５月８日であった。帰りに県道にはみでていたイブキジャコウソウの一かたまりを、稲刈鎌で切り取って下さった。家の垣根に植えてある。先生に最後にお会いしたのは、その年の７月中旬の、ある会合であった。先生は、生物学会の原稿を書いているのだが、書き上げたら郵送してもよいかとおっしゃった。私は締切が今年の12月末日ですから、そんなに慌てなくてもいいじゃありませんか、といって別れた。それが先生との最後になったのである。あとで学会事務局の田中晋先生にお聞きしたら、田中忠次先生からは原稿が１点、９月中にすでに届いているとおっしゃった。

年の瀬が押し詰まったある日、今はなき先生のお宅をお伺いしたとき、奥様とご子息ご夫妻にお会いした。ご子息は、つい数日前、49日の法要を済ませ、その折り、父が遺していった鱗粉転写の色紙で、テレホンカードを作りました、といって、私にそのカードを２枚下さった。１枚は春のヤマザクラの花に舞うギフチョウであった。それには「望み心に満つれば人老ゆることなし」と書かれており、もう１枚には秋のコスモスにタテハが転写してあった。これには「自然は時を貸してくれない」としたためられていた。

春のテレホンカードで、先生に初めてお会いした、あの昭和20年代に想いを馳せ、秋のカードで先生が原稿を急がれた理由に思いを沈めた。この「富山の生物」に掲載された、先生のご遺稿を、学会誌とともにご仏前にお供えし、改めてお悔みを申し上げるものである。